

中山間地域における各世代間の愛着度研究 ～高知県梼原町を対象として～

1150471 松本 真美

高知工科大学マネジメント学部

1. はじめに

1-1 概要

本研究では、高知県梼原町を対象として、地域の特性・特徴を調査した上で、地域に対する愛着や想いを世代別に明らかにし、愛着度の構成要因について分析した。その結果、各世代の愛着や想いの特徴として、少年層は自然や人柄、青年層は自然、人柄に加え生活環境、高齢者層は人間関係や住み慣れた土地であるという安心感、を重要視していることが明らかとなった。また、愛着心の形成要因となっているものは、自然環境や福祉支援の充実などの生活環境、伝統文化が町民に根付いていることであり、住民の定住意向に繋がっていることが示された。

1-2 背景

近年、日本では少子高齢化が急速に進み、深刻な社会問題として認識されている。特に中山間地域では、未来の担い手となる若者が都市に流出し過疎化・高齢化が著しく進んでいる。その結果、地域産業の衰退や跡継ぎ問題に加え、自治体の税収が減少しているなど多くの問題を抱えている。これらの問題がさらに進行すると、十分な福祉支援が望めなくなり、高齢者をはじめ若者の世代さえも満足に生活を送れない恐れがある。本研究の調査対象である高知県梼原町も、高齢者の割合が非常に高く、少子化が進行しており上記で挙げた問題を抱えている。しかし、梼原町は自然エネルギーの売電益で得られた基金により医療・福祉の面で充実したサービスを実現させている。これにより、元気でいきいきと暮らすお年寄りが多く、福祉政策が高齢者の「生きがい」の一つとなっている。

そのような状況下で、中山間地域に住み続けている人たちは、「ふるさと」に対して、①どのような想いや考え方を持って生活しているのか②各世代間で相違はあるのか③考え方に相違が出てくる原因はなにか④充実した福祉政策などは、住民の定住意向に関係しているのか興味を持った。

梼原町に在住する高齢者の生きがいを対象とした既往研究では、「生きがい」の要因となるものは「この地で生まれて、この地で死にたい」という愛着心からきていることがわかっ

ている。また、お年寄りには元気がその子ども世代は地域に残っておらず、将来的にも梼原町に戻るつもりもない意見もみられている(2012・三浦)。さらに、梼原町在住の高校生の意向としては、職場確保の視点から一時梼原町を離れても最終的には梼原町に戻りたいといった意見もみられた。このように、梼原町に対する考え方は、各世代によって明確に異なっており、地域への愛着度に関する既往文献をみても、地域への愛着は、住民の地域づくりに対する関心や地域活動への参加意向に深く関係していることがわかっている(2000・若林ら)。

以上から、実際に彼ら(梼原町に住む中高生・20代～60代)の考え方・愛着度・地域への想い・生活実態を調査・分析することは、梼原町を含め中山間地域のあり方・地域が直面している問題を考察する上で非常に重要であり、福祉政策や移住政策のさらなる充実につなげていくことができると考える。

1-3 目的

本研究の目的は、高知県のなかでも中山間地域である梼原町を対象として、各々のライフスタイルやライフプランに着目し、梼原町に対する「愛着」や「想い」を世代別に明らかにするとともに、愛着度形成には何が関与しているかを考察することを目的とする。

1-4 研究方法

本研究では、はじめに既往文献調査を実施し、愛着度や生きがいを構成している要因を整理した。次に、梼原町の地理的特徴を調査し、人口推移や実際に施行されている政策などをまとめた。さらに、調査する質問内容をまとめるとともに調査結果の抽出方法について検討した。そして、実際に梼原町にてヒアリング調査を行い(実施期間:2014'11/11～11/14)、その結果を世代別・性別に分類した。最後にまとめとして、ヒアリング結果から把握した事項について、考え方や想いの相違点がないかを分析し、考察した。

2. 高知県梼原町の概要

(1) 梼原町の地理・気候特性

梼原町は、高知県中西部、愛媛県との県境に位置する町で

高岡郡に属する。四国山地の中西部を占める山岳地帯であり、山間部に位置するため全般的に日照時間が少ない。日本最後の清流と言われる四万十川源流域に位置し、面積 23,651km²のうち 91%が森林である。

(2) 梶原町の町民性

豊かな自然環境を持ち、古くからの伝統文化を大切にしてきた背景があるためか、豊かな人情を持つ町民が多い。梶原町の自治経営の考え方の基本として、「自分たちでできることは、自分たちで取り組む」とする自立精神がある。これを、梶原人として定義している。

(3) 社会基盤

◎人口区分

平成 26 年度現在、人口は 3,677 人(男性:1,747 人、女性:1,930 人)で、65 歳以上の高齢化率は 40%を超えている。そして、図-1 を見てもわかるように、人口は年々減少傾向にある。

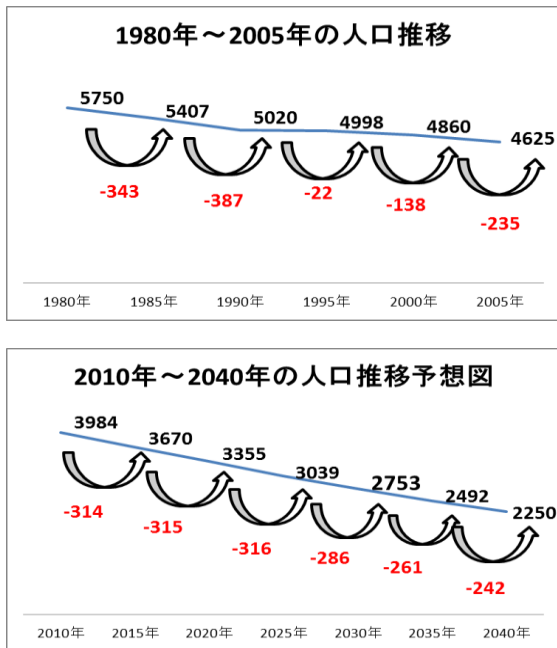


図-1 梶原町の人口推移(引用：国勢調査)

◎道路・交通

梶原町中心街を国道 197 号・440 号が走っており、高知市や松山市を結ぶ幹線道路として重要な役割を担っている。公共交通機関は、高知高陵交通が運営する路線バスがあり、高知・須崎および宇和島間などの路線を運航し、自家用車を有していない住民にとって、梶原町と市街を結ぶ重要な役割を果たしている。

交通は、自動車で梶原町から高知県高知市へは約 2 時間、

愛媛県松山市へは 2 時間 30 分程度かかる。

(4) 行政支援

【子育て支援】

◎保育料無料化

◎0～15 歳（中学卒業）まで医療費無料化

【高齢者向け政策】

◎IP 電話の設置・・・町内に限り無料で通話することができる

◎緊急通報システム・・・ボタンが押されたら登録者に対し放送またはメールが届く

◎見守りセンサー・・・80 歳以上の独居高齢者等の自宅に見守りセンサーを設置。動きがなかった場合、保健福祉支援センターおよび登録者にメールが届く。

3. 調査の概要

3-1 ヒアリング調査の対象

表-1 ヒアリング調査対象

	男性	女性	合計
10代	5名	5名	10名
20代	3名	1名	4名
30代	2名	3名	5名
40代	1名		1名
50代		2名	2名
60代	1名	1名	2名
70代	1名	1名	2名
合計	13名	13名	26名

調査対象者は、梶原町に在住する男性 13 名、女性 13 名の計 26 名である。

3-2 調査の内容

梶原町に在住している 10 代～70 代の町民の方を対象に、対面形式で 1 時間～2 時間程度ヒアリング調査を実施した。期間は、2014 年 11 月 11 日から 14 日の 4 日間である。

3-3 分析方法

ヒアリング調査時には、事前に質問内容を記載したメモのほかに、聞き漏らしを防ぐため IC レコーダーを研究参加者全員の許可を得て、テープに録音し使用した。

ヒアリング結果を分析するために、まずメモをした内容をワードにて書き写しを行い、IC レコーダーに保存した内容をもう一度確認することで、書き抜かりがないようにした。そ

して、そのなかでも、同じ内容や発言の強いワードを重点的に抽出した。さらに、ヒアリング結果を世代区分別（10～20代を少年層、30～50代を青年層、60～70代を高年齢層に分類）・性別に区分し、①榊原町に対する愛着度②榊原町の魅力③榊原町で生活する上での不満や要望④定住意向(老後も榊原町にいたい)か⑤今の生活に満足しているか⑥どういったときに幸せ・生きがいを感じるか⑦将来のライフプランという7つの内容に分類して分析・考察をおこなった。

4. 結果

4-1 ヒアリング調査結果

① 榊原町に対する愛着度

世代別・性別に見ても共通して、榊原町に対する愛着心が見られた。しかし、なかには「どちらでもない」という意見もあった（30代・男性）。愛着度が高い理由として、各世代共通して「人柄の良さ」という理由が挙げられる。50代からの世代は、「長年住み慣れてきた」、「知人が多い」ということからくる愛着心があった。

② 榊原町の魅力

どの世代も共通して出てきた回答は、「自然が豊か」、「人柄が良い」という意見である。30代からの世代は、子育て支援制度・高齢者に対しての福祉支援制度の充実を挙げていた。性別での相違では、女性は男性よりも子育て支援制度などの行政支援や近所付き合いに魅力を感じているようだった。

③ 榊原町で生活する上での不満・不安や要望

全体的に榊原町に対する不満が多かった意見は、男女ともに交通の面と物価が高いという意見だった。30代からの子どもを持つ方の意見では、教育の面を心配する声が多かった。（高校存続問題、競争する場がない。など）

要望の項目に関しては、全世代、雇用の場を増やしてほしいという意見だった。農林業を営む方の意見としては、「林業など山に携わる人を養成できる体制を整えてほしい」、「みんなで協力して出資し、希望の農作物を作れる体制にしてほしい」といった意見が挙がった。

④ 定住意向(老後も榊原町にいたい)か

20代は、4名中3名が「自然があり、人柄もよいから」というプラス意見が多いなどの理由から定住意向を示していた。しかし、男性のなかには、「長男であるから残り続けられない」という義務感を持っている方がいた。30代～50代

で、定住意向があった方に共通していた意見は、「家族がいるから、榊原に残りたい」という意見だった。また、30代の子どものいる方の意見では、「子どもを育てていく環境が整っているから」という意見が多くみられた。60代の意見としては、「知らないところへ出ていくのは不安だから」という意見であった。

定住意向が見られなかった方の意見としては、「第二の人生は違う場所で送っていききたい」（20代・男性）という意見や、「気にかけてくれる人がいるから、孤独死の心配がない面では◎だが、残りたいという気持ちはない。ただ、結婚した人が榊原にいたから榊原に残っているだけ」（30代・女性）という意見や「生活のために暮らしている」といった意見など、20代～30代の意見には、愛着心はあっても、定住意向に繋がるとは言い難い結果が得られた。

⑤ 今の生活に満足しているか

この項目に関しては、30代～70代の男女の満足度は高かったが、20代はどちらでもないという意見が2名いた。理由としては、収入が少ないという意見や、友人に会うために時間がかかるなど若い世代には、田舎暮らしに物足りなさを感じているようだった。

⑥ どういったときに幸せ・生きがいを感じるか

この項目に関しては、20代と50代に共通点が見られた。両世代、仕事を通じて得られる幸福感が生きがいに繋がっていた。（人に親切にしてもらった時・感謝してもらった時、たくさん悩んで解決できた時）30代～70代の子どものいる方は、子ども・孫の成長が本人の幸福感、生きがいに繋がっていた。また、「自分で作った農作物を、地域の人や息子に配るときに幸福感を感じる」という意見が挙がった。（70代・男性）

⑦ 将来のライフプラン

この項目に関しては、家庭を持っていない20代男性群は早期結婚願望が強く、結婚後も榊原町に住み続けていきたいという意見に対し、女性は結婚願望があまり見られず、もしかしたら町外に出たいと思うかもしれないという控えめな意見だった。

30代からの家庭を持つ男女は、生活のことを考慮して「現状維持」という意見や「マイホームを建てる」という積極的な意見が挙がった。対して、独身の男性は、「働くうちにやりたいことが見つければ、そちらを優先する」という意見があ

り、同世代でも家庭を持つ方と持っていない方で相違があった。

40代～70代の意見は、男女とも今の暮らしを変えたいという意思は見受けられず、「定年後は自給自足の暮らしを送っていききたい」という意見や「子ども・孫と暮らして家でゆっくり野菜作りしたい」という意見が多かった。

5. 考察

ここでは、愛着心を検討する際に、大きな判断材料となった【梶原町の魅力】と【定住意向の有無】の2つの質問事項において比較・考察を行った。

(I) 世代別

少年層は、自然環境に魅力を感じている一方で、都会に対する憧れや、職種の少なさから定住意向度は高くなかった。青年層は、自立して生活することの大変さを感じる機会が多くなることから、福祉支援の充実の魅力を感じ定住意向に繋がったと考えられる。高齢者層においては、将来介護が必要となったときなどに対する不安や人と接する機会の減少などの懸念材料から、定住意向が高かったと考えられる。

(II) 性別

女性は、子育てしやすい環境や近所付き合いが密接であることに魅力を感じている。定住意向が高かった要因としては、梶原町に在住する女性は、家事・子育てに向き合う時間の割合が多いため、近所付き合いなどコミュニティの輪に参加する機会が多い等、男女の生活スタイル・人間関係に対する考え方の違いがあると考えられる。

6. より愛着を持てる町にするために

ヒアリング・愛着形成要因から、地域が存続していくためには住民の愛着心が重要と考え、より地域に愛着を持てる町にするために必要となる改善点を以下の4点にまとめた。

(1) インフラ整備の見直し

・街灯の設置・松原地区の交通整備・教育機関の存続

(2) 地域と住民の繋がり強化

・コミュニティの場の創出・伝統文化の保存

(3) 福祉支援制度の見直し・強化

・保育所までの距離が遠いなど、通園が容易ではない方を対象とした送迎バスの設置

(4) 主要産業後継者の育成

・高齢化による耕地管理の困難から、農林業の体制見直しが

見込まれる。

7. まとめ

本研究をまとめると以下の2項目が挙げられる。

(1) 梶原町に対する想いの世代別特徴として、

・少年層—自然や人柄に魅力を感じているが、町外での暮らしを求める者が多かった。

・青年層—自然・生活環境に魅力を感じ、安心感から定住意向度は高かった。

・高齢者層—利便性に欠ける場所であっても、住み慣れた土地や周囲との人間関係に魅力、愛着を持っているため、定住意向に繋がっていることが言えた。

しかし、少年層～青年層のなかには、収入の少なさを不満に感じている方がおり、愛着はあっても定住意向にはつながらない場合があった。若年層にとって、「収入」の少なさは町外へ出ていく要因となっている可能性が考えられた。

(2) 地域に対する愛着心の形成要因となっているものは、自然環境や福祉支援の充実などの生活環境、伝統文化が町民に根付いていることである。

8. 今後の課題

本研究では、梶原町民にヒアリング調査を行い、世代間・性別の相違点を探ったが、歴史的背景からも相違点が生じた影響要因を検討していきたい。さらに、都心部と中山間地域においては、愛着度に相違は生じるのか調査結果を比較したい。

9. 参考文献・引用文献・協力者

- [1] ゆすはら町 第一章 梶原町の現状整理
- [2] 梶原町史 1～3
- [3] 梶原町役場・梶原町在住の皆様
- [4] 中山間地域における高齢者の「生きがい」について 三浦 亮太郎(2012)
- [5] 地域に対する愛着形成過程 (引地 博ら)
—社会的アイデンティティからの検討—
- [6] —住民の防災意識の構造に関する研究—(若林直子ら)